「男、突っ走る！」

第24回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内	雅也	（18）	中央高校3年2組生徒
濱口	寧々	（18）	中央高校3年2組生徒
杉山	優菜	（18）	中央高校3年2組生徒
滝	由紀恵	（18）	中央高校3年2組生徒
水澤	光太	（18）	中央高校3年2組生徒
宮田	春奈	（18）	中央高校3年5組生徒
尾形	安代	（54）	中央高校3年2組担任
西澤	隆雄	（44）	中央高校1年1組担任
井深	武彦	（40）	中央高校生徒会主任
入沢	茜	（32）	中央高校3年2組副担任

1　中央高校・全景（朝）

2　同・廊下

雅也が歩いている――と、西澤が通りかかる。

雅也「（西澤を見て）西澤先生」

西澤「（足を止めて）おお、木内か。どうだ、脚本のほうは進んでるか」

雅也「何とか。まだ決まってませんが、これから頑張ります」

西澤「去年木内の作品読ませてもらったことがあったが、お前には書く力があると思った。頑張れよ」

雅也「はい」

と、去っていく西澤――ふと笑顔がなくなる雅也。

3　同・職員室

雅也と安代が話している。

安代「そう。ダメだったの」

雅也「はい」

安代「これからどうするの？　まだ応募続けるの？」

雅也「できるだけのことは、やってみようと思います」

安代「そう。まあ、無理しない程度にね。これから学校祭の準備だって本格的になるし、入沢先生から伺ったけど、ＩＴパスポートの試験も受けるんでしょ。適度に休むことも大事だからね。体壊したら、どうしようもないでしょ」

雅也「はい」

安代「一度、進路指導の先生にも相談してみたら？　あと、ご家族ともよく」

雅也「ええ」

と、入沢が入ってくる。

入沢「あ、ちょうど木内君いたわ。（と参考書を渡し）はいこれ、ＩＴパスポートの過去問が載ってる問題集」

雅也「（嬉しそうに）ありがとうございます」

入沢「木内君は本当にＩＴパスポートのことになると、目の色変えるわね」
雅也「だって、せっかく受けるんですから、ちゃんと合格したいじゃないですか。だからこういうのを見ると、つい力が入っちゃって」
安代「やっぱり木内君は、情報活用コースの子ね。検定試験とか問題集見てるときが、一番生き生きしてるもの」
雅也「こういうことが好きなんでしょうね。自分でも、脚本書いてるときと検定勉強してるときが、一番自分らしさを出せるような気がしてます」
入沢「みんなが頼りにしてるのにも合点が行くわ。それに、中には嫌々検定勉強してる子もいるからね。木内君の姿を見て、気持ちを切り替えてくれる子がいると良いんだけど」
雅也「自分で情活用コースを選んだのに、検定勉強が嫌だなんて単なるわがままですよ。

僕はね、検定勉強も何もかも、楽しもうっていう気持ちで臨んでるんです。それに、高校卒業までもう一年もないんです。最後の情報活用コース、楽しみたいじゃないですか」

安代「木内君は学校が好きなのね」

雅也「ええ、大好きですよ。そうじゃなかったら、同じ時期に生徒会役員と学級代表と部活の副部長なんてやってません」

安代「それもそうね」

入沢「（雅也に）検定勉強のこと、何かあったらいつでも教えるからね」

雅也「ありがとうございます。早速やってみます。失礼しました」

と、出ていく。

入沢「脚本の応募、上手くいってないんですか？」

安代「この間、二社応募したみたいですけど、両方ともダメだったみたいです。片方は一次審査までは通ったみたいなんですけどね」

入沢「そうですか」
安代「精神的な負担になっていないか、心配です」
入沢「ＩＴパスポートの勉強をしてるときは、そういうことも忘れて夢中になってるんですけどね」
安代「ある意味、あの子にとって検定勉強は脚本の応募っていうものから逃げる、言わば現実逃避なのかもしれませんね」
入沢、不安そうな顔になる。

4　同・図書室

雅也が参考書を見ながら勉強をしている――と、春奈が入ってくる。
春奈「あれ、パンテーンいるじゃん」
雅也「どうしたの春奈」
春奈「歯科衛生士の参考資料見に来たの」
雅也「そっか」
春奈「そういえば、脚本の審査どうだったの？　第一次審査通ったんでしょ？」

雅也「うん……第一次はね。けど、第二次で落とされちゃった」
春奈「そっか……」
雅也「なかなか決まらないね」
春奈「早く、パンテーンの作品が評価されると良いね」
雅也「うん……」
春奈「私も頑張るから、パンテーンも頑張ってね」
雅也「ありがとう」

5　同・三年二組教室

光太、寧々、由紀恵、優菜が話している。

寧々「文化祭の飲食ブース、焼きそばにするって決まったは良いものの、みんな手伝う気あるのかな」
光太「しょうがねえよ。面倒なことは押し付けるような男子が多いんだから」
由紀恵「夏休みも集まって準備するって言っ

たのに、誰も集まろうとしないなんて」
優菜「ママも、脚本の応募と資格勉強中だから、アテにできないしね」
寧々「だから前に言ったでしょ。いつまでもママばっかりに頼るのはダメだって」
光太「確かに。これまでの学校生活振り返ると、何かとうっちー頼みなことばっかりだったもんな。面倒なことも、嫌な顔一つせずにやってくれてさ」
優菜「ママがいなくても、私たちでできるようにしないとね」
寧々「そういえば、去年のＰＲ委員会のときは、大変だったよね」
優菜「あったね、そんなことも。あの時のママは本当に可哀想な立ち位置だった」
光太「あれは、他のクラスのメンバーがハズレだったんだろ」
寧々「まあね。でも何とかやり切ったから良かったけどさ」
由紀恵「今年はＰＲ委員会、見事に断ったら

しいじゃん」
光太「そりゃ生徒会のほうで、学校祭の運営側に回らなきゃいけないんだから、ＰＲ委員会に時間費やす暇なんてないんだろ」
由紀恵「なるほどね」
寧々「ねえ、あと何決める？」
光太「もう特にないんじゃねえか？」
優菜「こういう時、ママならどうするんだろう」
寧々「あ……クラスＴシャツ作らない？」
由紀恵「それ良いね」
優菜「でもどうやって作るんだろ」
寧々「よし、井深様に相談だ」

6　同・生徒会室
寧々が来ており、井深と話している。
井深「クラスＴシャツ？」
寧々「はい。作れるんですよね」
井深「ああ。デザインと生地、色、部数を提出してくれたら、後はこっちで手配する」

寧々「ありがとうございます」
井深「やっぱり、二組もTシャツ作るのか」
寧々「他のクラスはどうですか？」
井深「三年生はこれで全クラス、Tシャツを作ることになるな」
寧々「やっぱり、最後の学校祭ですもんね。記念に作りたいって思うのは当然ですよね。これでもっと、みんながやる気になってくれたら良いんですけど」
井深「何だ、二組は進んでないのか」
寧々「夏休みも集まるって言ったのに、集まりが悪くて。今日なんて私入れて四人しか集まってないんですよ」
井深「こういうイベントは、企画をするときは人数を少なめにして、当日動いてくれる人員を多く確保したほうが、バランス良くできるかもしれないぞ」
寧々「けどうちのクラスは、話し合いには参加しないくせに、いざ何かが決まると文句とかヤジを飛ばすような人が多すぎるんで

すよ」

井深「特に二組は男女比のバランスが悪いからな」

寧々「そうなんです。他のクラスが羨ましいですよ」

井深「まあ、今回が最後なんだ。ちゃんと当日は、クラスのみんなが楽しめるようにしないとな」

寧々「それは分かってるんですけどね、なかなか上手くいかなくて……」

井深「二組は、三年間ほとんどクラスが変わらないんだ。他の男子がいるクラスよりは、団結力があるクラスだと思ってたけど」

寧々「男子同士は、そりゃ良いですよ。でも男子と女子の壁が……」

井深「二年間も同じクラスなのに、そんな壁があるのか？」

寧々「そりゃ入学当初と比べたら、壁の厚さは薄くなってると思いますよ。けど、まだ完全に壊しきれてないというか」

井深「じゃあ、最後の文化祭でその壁を壊さないとな」

難しい顔の寧々。

7　同・コンピュータ室

光太、寧々、由紀恵、優菜がパソコンの画面を見ながら、Tシャツのデザインをしている。

寧々「うーん、どれが良いかな」

優菜「どうやってやろうかな」

光太「ああ、何も思いつかない」

由紀恵「このパズルのデザインとかどう？」

寧々「あ、それ良いかも。パズルのピースに、みんなの名前入れようよ」

由紀恵「賛成ッ」

光太「よくそんなにバンバンとアイディア出てくるな。やっぱ女子の力はすごいわ」

優菜「こういうのは、女子のほうがセンスあると思ってるから。男子に変なこと言わせないんだから」

寧々「女を敵に回すと怖いよ」
由紀恵「何なら、どうなるか思い知らせてやろうかな」
光太「頼むから穏便にやってくれよ」
寧々「はいはい」
と、雅也が入ってくると、
雅也「あれ、みんな揃ってどうしたの？」
寧々「学校祭の準備に決まってるでしょ」
雅也「ああ、完全に忘れてた。ごめん」
優菜「気にしないで。ママも今、いろいろ忙しいんでしょ？　学校祭のことは、私たちがやっとくから」
雅也「けど、みんなに投げっぱなしにするわけにはいかないでしょ」
由紀恵「そうやって心配するのは、木内ぐらいじゃないかな。他の男子は、協力してくれないみたいだし」
雅也「それは、みんな自分が何をして良いのか分からないからだよ。あらかじめ、こういうことを考えてほしいって具体的に何か

お願いすれば動いてくれるんじゃないかな」
優菜「どうかな」
雅也「もし動いてくれなかったら、俺がみんなを動かす」
寧々「結局、ママの力を借りることになるんだ」
光太「俺たち、うっちーに頼らずにやってみようって話してたんだ」
雅也「どうして？」
寧々「これまでママに頼りすぎたことが多かったから、それじゃ良くないなって思ってさ」
雅也「そんな冷たいこと……何もしない飼い殺しが一番辛いんだよ。頼りにするとかしないとか、クラスでやることにそんなこと関係ないでしょ。学校祭はみんなでやる行事なんだから。誰かが負担になって準備するようなものじゃないの。そりゃある程度の軸を決めたり、仕切る人は必要だよ。でもそれをもとに動いていくのは、クラスの

みんななんだから。そこのバランスが壊れたら、何やっても上手くいかないんじゃないかな。って、何もやってない俺が言うのもおかしいか（と笑ってごまかす）」

寧々「そんなことない。ママの言う通りよ」

雅也「俺は当日、設営側に回るから、多分ゆっくりみんなとブース出展の手伝いはできないと思う。だからこそ、こういう準備の時に協力したいの」

優菜「そう言ってくれるだけで、今日の私たちは救われたわ」

雅也「そんな大げさな」

優菜「本当よ。これからどうやってやろうか不安になってたんだもの。その不安が、解消された」

雅也「なら良かった」

由紀恵「今、Tシャツのデザイン考えてたところなの。どうかな」

雅也「え、見たい見たい」

と、興味津々にパソコンの画面を見る。

由紀恵「どう？」
雅也「良いと思う。みんなの名前がパズルのピースに入ってるのが良いね。あ、ちゃんと安代ちゃんと茜ちゃんも入ってるんだ」
由紀恵「そりゃそうよ。あの二人だって、二組の大切な仲間だもん。名前入れるのは当然でしょ」
雅也「二組の仲間ねぇ。良いじゃない、そういう気持ちでこのTシャツを作ったってことが、クラスの子たちが知ったら絶対喜ぶよ。このTシャツ着たら、団結力が深まって、かえって準備もスムーズに行くかもね」
由紀恵「そうだと良いけど」
雅也「同じ釜の飯を食うっていう理論と一緒よ。みんなで何か同じ共通したアイテムを手にすると、それで一気に団結力とか一体感が生まれるんだよ」
由紀恵「なるほどねぇ」
雅也「このTシャツ、着るのが楽しみになってきたわ」

由紀恵「本当？」

雅也「うん。間違いなく、二組の記念になる代物になるだろうね。これ着て、みんなで集合写真も撮りたいもん」

寧々「確かに、そういうのも良いかもね」

雅也「企画をする人自身が楽しまないと、みんなは楽しめないと思うよ。みんながワクワクして、キラキラと楽しめるような状態になるのが一番。そのためには、型枠を作る人がそういう気持ちになって楽しむことが大事よ」

寧々「やっぱり、ママがいてくれて良かったわ。ママの言う通り、軸になる私たちが楽しまないとね」

雅也「そうだよ。楽しい気持ちも暗い気持ちも、あのクラスはすぐ広まるんだから。楽しい気持ちをずっと維持して上手く波及させないと」

寧々「よし、何かエンジンかかってきたわ」

笑顔で頷く雅也。

8　同・職員室

寧々が安代にTシャツのデザインを見せる。

安代「素敵なデザインになったわね。あら、私と入沢先生の名前も入れてくれたんだ」

寧々「当然。安代先生も恵先生も、二組の仲間ですから」

安代「学校祭の準備、実はどうなってるのかって心配してたの。けど変に私や入川先生が口を出すのはどうかと思って、あえて何も言わなかったの。あまり良い雰囲気じゃないような気がしてたけど、その心配はなさそうね」

寧々「はい。まずは、私たち自身がまずは楽しもうって決めたので」

安代「そういう気持ちは大事よね。濱口さんたちが楽しく準備をしてたら、他の子たちもそれに影響されて、動いてくれるかもしれないものね」

寧々「そうなってほしいと思ってます」
安代「何かあったら、すぐ相談しなさいね。
私だって、二組の仲間なんですから」
寧々「（笑って）はい」

9　同・中庭

自販機のジュースを買っている雅也―
―側で既にジュースを持っている光太、
寧々、由紀恵、優菜。

雅也「井深先生にTシャツのデザインと注文
部数も報告できて、後はできあがるのを待
つだけだね」
光太「何とか進んだな」
寧々「ママ、ありがとう」
雅也「気にしないでよ、俺は何にもしてない
んだから。それに、俺はただ、学校祭を楽
しみたいっていう気持ちは忘れないで持っ
ておこうと思って」
由紀恵「これから、積極的にみんなにも協力
してもらわないとね」

雅也「俺からも、声がけはしとく。夏休みだから、それぞれの都合があって来れないだけで、ちゃんと準備から手伝いたいって思ってる子もいるって信じてる。特に俺の周りは、言えばちゃんと動いてくれる子だって思ってるから。早速、利樹と康光とかっちゃん、あとは清水、そーぴ、すぎちゃん、松田に匠……一通りお願いできそうな人には頼んでおくから」

寧々「ありがとう。それだけ声かけてくれるだけでも、助かる」

由紀恵「みんなで、最後の文化祭、楽しもうね」

雅也「もちろん」

光太「ああ」

寧々「そうね」

優菜「これが、三年間の集大成になるようにしなきゃね」

雅也「学校祭全体の運営に回って、ずっと手伝えないことが、唯一の心残りになるわ」

優菜「しょうがないよ、ママは生徒会役員なんだもの」
雅也「でも当日は様子見て、二組のブースに顔出せるようにするから」
由紀恵「それはちゃんと来てもらわないと。木内だって、二組の大事な生徒なんだから」
雅也「分かってます」
と、チャイムが鳴る。
雅也「そろそろ帰りますか」
優菜「そうね」
と、ジュースのゴミを捨てると、階段を下りて駐輪場へ向かう。

つづく